二　末代の五逆女人に、安養の往生をねがはしめんが爲めの方便に、釋迦章提調達闍世の五逆をつくりて、かゝる機なれども、不思議の本願に歸すれば、かならず安養の往生をとぐるものなり、としらせたまへりとしるべし。（御文）

第五節　諸機廻入

九　定散諸機各別の　自力の三心ひるがへし
如來利他の信心に　通入せんとねがふべし

左訓　○よろづの、しゆじやう。○千萬なり。○ほんぐわん、しんじちの、しんじむなり。

一、大旨　此一首は、觀經の、『一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者、必生彼國。』の文意に依りて、重に正宗分流通分の大體に亘り、自力の三心をひるがへして、他力信心に通入せよ、と勸められたるものである。

二、句釋　○定散諸機　一切衆生の機類を大別して定機散機とし、其中より又各種の根機が分れ出づるもゑ諸機といふ。○自力の三心　觀經に說いてある、至誠心、深心、廻向發願心の三心である。一に至誠心とは、至は眞也誠也といふて、眞實心のこと。此至誠心は、虛假不實の心を匡正して、眞實心になること。二に深心とは、深く信ずるの心で、深く心にもひ定むること、卽ち自力の信心である。三に廻向發願心とは、己が修したる行を、此れも往生の爲、彼れも成佛の因なりと廻向して、極樂往生を願ふ心。○利他の信心　他力の三信のこと、利他とは他を利すること、佛の御力にて衆生に信心を與へたまふこと、それもゑ他力の信心を利他の信心といふ。○通入せんとねがふべし　通入とは定散の要門を出でゝ、第十八願の弘願一乘へ通入すること。ねがふべしとは結勸の辭で、上來

九首の和讃を結び止めて、定散自力の心をひるがへして、弘願他力に通入したいことねがへよと、他力の信心をすゝめ給ふものである。

三、通釋　一　觀經は第十九願を開說して、定散諸機の相を說いて、定善の機の者は定善の行で往生せよ、散善の機のものは散善の行を修して往生せよと、九品の往生を勸めてある。それは定散の二機は孰れも自力の修行を當てにしてをる人々なるが故に、其起すところの信心なるものも、又機類に應じて各別である。此意をこゝに、定散諸機各別の自力の三心と仰せられたるものである。

二　抑も觀經を伺ふに二樣の見方がある、一には顯、二には隱である。顯とは顯彰として、之れは經文の文面に顯はれをるまゝに伺ふときの義で、隱とは隱密として、經文の文意に含まれてをる實義を伺ふときの場合をいふのである。それゆゑ顯彰よりいふときは、一經は始めより終りまで、定散要門を說き顯したるものとし、隱密よりいふときは、一經はすべて弘願他力を說いたものであるといはねばならぬ。依つて此両義の中で、顯說の要門定散は、暫らく定散の諸機を誘引する爲に說いたもので、佛の眞意は隱密の實義を顯すを以て目的とするといふことになる。

三　此の如く一經の表面には、定散諸機各別の相を說いてあるけれども、此自力の信心を勸むるのが目的ではなく、是等の諸機をして弘願他力に入らしめ、報土の往生を遂げしむるを以て、其主要とするのである。其意をこゝに、定散諸機各別の自力の三心をひるがへし、如來利他の信心に通入せよと仰せられたるものである。

四要文　一　娑婆化主、因二其請一故、卽廣開二淨土之要門一、安樂能人彰二別意之弘願一。其要門者、卽此觀經定散二門是也、定卽息慮以凝心、散卽廢惡以修善、廻斯二行一、求二

往生也。（玄義分）

二　竊按觀經三心往生者、是則諸機自力各別之三心也、爲歸大經三信也、勸誘諸機、欲使通入三信也。三信者、斯則金剛眞心、不可思議信心海也。（愚禿鈔）

三　上來雖說定散兩門之益、望佛本願、意在衆生、一向專稱彌陀佛名。（散善義）

四　良知此乃此經有顯彰隱密之義、二經三心將談一異、應善思量也、大經觀經依顯義異、依彰義一也、可知。（化身卷）

第六節　觀經和讃概要

一　吾祖が觀無量壽經の意に依つて御製作なされたる和讃は九首ある。先づ最初の一首は、大聖釋尊が韋提希夫人をして、十方淨土の中より、特に彌陀如來の淨土を選ばしめられたことを明かし、第二首及第三首は、阿闍世王が逆惡を起して、父を禁錮し母を殺さんとしたる因緣を示し、第四首には、太子が瞋怒の餘り母を殺さんとせしとき、耆婆月光の諫によりて殺母の大罪を止めて、此れを幽閉したる旨を述べられた。さて第六首より以下三首は、此事件の起つた根本目的を示して、かゝる悲慘なる大事件の興りしは、大王夫人太子提婆達多等の人々か、我等未來の凡夫を共に弘願他力に入らしめ給はんとする、方便誘引の方法を示されたるものとなし、之れ全く彌陀釋迦二尊の大悲矜哀の然らしむるところなりとの旨を示され、最後の第九首に於て、定散諸機各別の自力の三心をすてゝ、弘願他力の利他の信心に通入せよと、結勸なされたるものである。

二　吾祖が此和讃を御作りなされたる思召を伺ふに、大凡二つの意味がある。前節にも述べたる如く、觀經は隱顯の二方面があるが、和讃は顯の義はすべて御用ひなくして、全く隱の義のみを述べられてある。之れは三經一致の弘願他力の旨を示して、淨土眞

宗の實義をた示しなさるゝ思召である。即ち和讃なるものは彌陀如來の德を讃歎して、衆生に信心を御勸めなるものなるが故に、三經一致の弘願他力を顯すことを以て主意とせらる、而して此弘願他力は、全く經の隱蜜の義であるから、觀經讃では顯の義に依らずして、殊に隱の義のみに依られたものである。次に觀經は大經と同じく、矢張序分正宗分流通分の三分に分かれてをるが、此三分の中、和讃は多く序分の意を述べて、正宗流通の二分は略し、之れを最後の一首に含めてある。此れは第一節に於て述べたる如く、機の眞實を顯すを以て目的とするといふ旨を示したもので、大經の法の眞實を蒙る機は、觀經の韋提希夫人、頻婆娑羅王、又阿闍世等の如き機類であつて、惡逆の凡夫が本願の目當であるといふことを知らせんが爲である。

第五章　阿彌陀經和讃

第一節　總題表章

彌陀經意　五首

一　こゝに彌陀經意とあるは、次下の和讃は、阿彌陀經に依つて作ることの意を示されたるものである。阿彌陀經は、釋尊が舍衛國の祇樹給孤獨園に於て、舍利弗に對してた說きなされたるものである。先づ初めに極樂の位置を示し、次に極樂の名を解釋し、進んで寶樹寶池音樂等の莊嚴を讃め、光明無量壽命無量を以て阿彌陀佛の御名を解釋し、かくて此極樂に生るゝには、自力の小善根小功德にては往生が出來ぬもの、多善根多功德の念佛を稱へよとた勸

めなされ、最後に十方恒沙の無量の諸佛が、念佛の功德の空しからざることを證明してをらるゝといふ意を述べてある。

第二節　名義解釋

一十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてざれば　阿彌陀となづけたてまつる

左訓　○こまかなるちり。○おさめとる。○ひとたびとりて、ながくすてぬなり。せふはもののにぐるを、おわねとるなり。○せふはおさめとるしゆは、むかへとる。○おさめとりたまふなり。

一、大旨　此一首は、阿彌陀經の、「舍利弗、於汝意云何、彼佛何故、號阿彌陀。舍利弗、彼佛光明無量照十方國、無所障礙、是故號爲阿彌陀。」の文と、禮讃の「問曰、何故號阿彌陀。答曰、彌陀經及觀經云、彼佛光明無量、照十方國、無所障礙、唯觀念佛衆生、攝取不捨、故名阿彌陀。」の

文に依りて、阿彌陀といふ名義の意味を解釋せられたるものである。

二、句釋　○十方微塵世界　十方にある微塵數の世界といふことにて、小經の照十方國と、禮讃の十方世界微塵刹土等の語によつて、十方微塵世界と仰せられた。○念佛衆生　念は憶念の義である、心の憶念より口に南無阿彌陀佛と顯はれ出つる稱名のこと。此念佛を稱ふる者を、念佛の衆生といふ。○みそなはし　觀照の意にして、照らしみらるゝこと。○攝取してすてざれば　攝取とは、左訓に、ひとたびとりて、ながくすてぬなり。せふは、ものゝにぐるをわねとるなり。せふはたさめとる、しゆはむかへとるなりとあつて、阿彌陀如來の御手を以て、たさめとらせらるゝことを攝取といふ。

三、通釋　一　何が故に阿彌陀と名づけ奉るやといふに、此尋ねに答へたるものが佛の御名であつて、此中に一切の衆生を攝めたすけすくふといふ意義が含まれて、攝取不捨の義がそのまゝ阿彌陀の名義となつてをるのである。かるがゆゑに御文にも、遍照の光明をはなちて行者を攝取したまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛の四の字のこゝろなり、と仰せられてある。

二　然らば攝取不捨とは如何なる意であるかといふに、佛が光明の中に、念佛の衆生を攝め取つて、捨て給はざることである。我等凡夫は、曠劫已來三界に流轉し、永く迷の世界を離るゝことが出來なんだのである。然るに佛の方から光明名號の因緣を以て我等を導いて下されたるゆゑに、如何に惡逆の凡夫と雖も、今は逃ぐるに道なく、遂に宿善到來して信心決定の身となり、往生一定の思に住するやうになつた。之れが全く六字名號の用きで、卽ち攝取不捨の顯はれと申すべきである。

四、要文　一　光明遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨。（觀經）

二　衆生憶念者、佛亦憶念衆生。（定善義）

三　金剛堅固の信心の、さだまるときをまちゐてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける。（高僧和讃）

四　さて阿彌陀佛といふは、かくのごとくたのみ奉る衆生をあはれみましまして、無始曠劫よりこのかたの、おそろしきつみとがの身なれども、彌陀如來の光明の緣にあふによつて、ことゝく無明業障のふかきつみとが、たちまちに消滅するといへるこゝろ、すなはち阿彌陀佛とは申すなり。されば阿彌陀といふ三字は、おさめ、たすけ、すくふとよめるいはれあるがゆへなり。（御文）

第三節　簡行正勸

二恒沙塵數の如來は　萬行の少善きらひつゝ
名號不思議の信心を　ひごしくひごへにすゝめしむ

一、大旨　此一首は、阿彌陀經の六方段の意に依りて、十方恒沙の諸佛が衆生に對して、諸善萬行にては往生の因を成し難ければ、よろしく他力不思議の本願を信じて念佛すべしと、諸行をすてゝ獨り念佛の一行を勸め給ふとのこゝろを、わ示しなされたるものである。

二、句釋　○恒沙塵數の如來　恒沙は恒河の沙の數といふこと、塵數は微塵數といふことにて、十方世界にまします無量無邊の諸佛如來と申すこと。○萬行の少善きらひつゝ　萬善諸行は隨緣の雜善と名づけて、淨土往生の正因にあらず、而して之れを念佛の多善根多福德に對して少善といふ。○ひごしくひごへにすゝめしむ　恒沙塵數の如來が、一齊にわすゝめなさるゝこと。

三、通釋　一　十方恒沙の諸佛如來は、諸善萬行を以て、少根善少功德なりと貶しめなさるゝ、何となればたとひ華嚴法華等の大乘の教へにても、彌陀の淨土に往生するに當つては、總て雜行となり、何等の價値もないからである。然るに名號不思議の信心は、他力廻向の信心なれば、一度此信心を貫ひ受くると、必ず眞實報土の往生が遂げらるゝのである。それゆゑ諸佛如來は、彼の少善根少功德の諸善萬行をすてゝ、多善多福德の名號を稱へよと、ひごしくひごへにわ勸めなさるゝのである。

四、要文　一　極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專。（法事讃）

二　隨緣雜善恐難生といふは、隨緣は衆生のおのゝ緣にしたがひて、もろ〳〵の善を修するを極樂に廻向するなり、すなはち八萬四千の法門なり、こ

れはみな自力の善根なるがゆへに、眞實報土にはむまれずときらはるゝゆへに、恐難生といへり。（唯信鈔文意）

第四節　證誠護念

三　十方恒沙の諸佛は　極難信ののりをとき
　　五濁惡世のためにとて　證誠護念せしめたり
四　諸佛の護念證誠は　悲願成就のゆへなれば
　　金剛心のにんひとは　彌陀の大恩報ずべし

左側　○つよし反。○こむがうは、やふれず、ただれず、やふれられず、うごかぬこゝろなり。

一、大旨　此二首は、前上の和讃と同じく、小經の六方段のこゝろに依りて、諸佛如來が念佛を證誠護念し給ふとのこゝろを、示されたるものである。

二、句釋　○極難信ののりをとき　極難信とは念佛のことで、煩惱具足の凡夫が、信の一念に生死を離れて、佛になる最勝の法なれば極難信といふ。此難信の念佛を說き顯はさるゝゆゑ、のりをときと仰せられた。○證誠護念　證誠とは證明といふと同じく、十方の諸佛如來は、衆生の往生まちがひなしと、念佛往生の誠實なることの證明にたゝちなさるゝこと。護念とは、護は覆護、念は念持の義で、行者の信心の失せぬやうに、いつも、たゞ護り下さると云ふこと。○悲願成就　大悲の本願成就といふと、而して此悲願は四十八願の中では、第十七願のことである、第十七願のことを何故大悲の願と名づくるかといふに、吾等衆生をたゞ救ひ下さる六字名號の出來上つたのは、此願なるがゆゑである。勿論此願に限らず、他の本願のすべてが大悲の願であるが、殊に利他大悲の根本たる名號の

成就は、此第十七願なるがゆゑである。

三、通釋　**一**　十方恒沙の諸佛如來は、念佛の一法でなければ、五濁惡世の衆生が助かる途はない、此念佛は世間極難信法であつて、至つて勝れたる法なれば、之れを信じ之れを行ずるときは、必ず成佛することが出來ると、證誠護念なさるゝのである。

二　抑も諸佛如來が此念佛利益を證誠護念なさるゝは、諸佛自ら證據にたたちなさるゝにあらず、もと彌陀如來が第十七願に於て、十方無量の諸佛に對して、我が名號を稱揚讃嘆せられたいと誓はせられ、之れを以て十方衆生の疑をはらし、信心を得さしめたいといふ願があるからのことである。されば諸佛の證誠護念も、偶然に起つたことではない、其源はすでに彌陀如來の本願に本づくものなれば、此證誠護念の德をきくにつけても、彌陀一佛の大恩を報謝せねばならぬ。

四、要文　**一**　小經勸信二、證誠二、護念二、讃嘆二、易行二。（愚禿鈔）

二　設我得佛、十方世界、無量諸佛、不三悉咨嗟、稱二我名一者、不取二正覺一。（大經）

三　眞實信心うることは、末法濁世にまれなりと、恒沙の諸佛の證誠にわかたきほとをあらはせり。（正像末和讃）

第五節　簡機結勸

五　五濁惡時惡世界　濁惡邪見の衆生には
彌陀の名號あたへてぞ　恒沙の諸佛すゝめける

一、大旨　此一首も亦上と同じく、六方段の意により、十方の諸佛如來が我等衆生に對して、念佛往生をゝ勸めなさるといふ意を述べ、以て本讃の結びとせられたるものである。

二、句釋　○五濁惡時惡世界　五濁惡時は時節の惡きことを顯

はし、惡世界は處の惡きことを示す。○濁惡邪見の衆生　濁惡とは五濁の中の衆生濁にて、末の世になればなるほど、人が惡くなるといふこと、邪見とは因果を撥無すること。○彌陀の名號あたへてぞ　濁惡邪見の衆生に對して、諸行をねらひすてゝ、彌陀の名號の一つを與ふること。○恒沙の諸佛すゝめける　諸佛は名號の一法を信ぜよと衆生にたすゝめなさること。

三、通釋　一　我等衆生はたまゝ佛道修行せんと志を立てゝも、五濁惡時惡世界の今の時分なれば、時節もわろく處もわろく、殊に今日の衆生は濁惡邪見の日暮をして居るものなれば、佛法の道理を聞いても容易に信仰も起さぬ。斯樣なことではいつまでたつても、佛になる時節はない。それゆゑに諸佛方は彌陀の名號をすゝめなされて、末代濁世の凡夫には、之れより外に助かる途はないゆゑ、速かに此法を信じて往生を遂げよと、仰せらるゝのである。

四、要文　一　十方各有恒河沙等諸佛、同讃釋迦能於五濁惡時惡世界惡衆生、惡見惡煩惱惡邪無信盛時指讃彌陀名號勸勵衆生稱念必得往生即其證也。（散義）

二　故使如來選要法といふは、釋迦如來よろづの善のなかより名號をねらひとりて、五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信のものにあたへたまへるなりとしるべし、これを選といふ、ひろくねらぶといふこゝろなり。要はもはらといふは名號なり。（唯信鈔文意）

第六節　阿彌陀和讃概要

一　吾祖が阿彌陀經に依つて御作りなされたる和讃は、前上の五首である。總體阿彌陀經一部は二段に分れて、最初は、彌陀の淨土の依正二報の莊嚴を讃嘆し、末の方は、衆生に往生をすゝめたまふのである。それゆゑに此和讃でも初の一首は、彌陀如來を讃嘆

し給ひ、次下の四首は諸佛の勸信をも示しなされたのである。此勸信に就て、御經の上では、釋迦の勸信、諸佛の勸信と分れてをるが、和讃はすべて諸佛の勸信といふことが略してある。之れは三經を三佛に配當するときは、阿彌陀經は諸佛を顯す經なるがゆへに、釋迦を諸佛の中に攝めらるゝ思召である。

二　此御經も觀經と同じく、隱顯二義の見方がある。何故かといふに、上に已に述べた如く、阿彌陀經は第二十願を開說して、自力念佛の機を誘引なさるゝが目的である、それゆゑ表面から伺へば、全く定散自力の稱名をも勸めなされてあるけれども、隱の義卽裏面から向へば、第十八願の他力念佛を說き顯はされたるものと見ねばならぬのである。此の如く一經の旨趣が隱顯二義と分るゝも、和讃は顯の義に依らずして、全く隱の義のみを依用せられてある。之れは三經一致の弘願を述べて、他力眞宗の極致を知らしめんが爲である。

第六章　諸經和讃

第一節　總題標章　九首

諸經のこゝろによりて彌陀和讃

一　上來述べ來れる和讃は、專ら正依の三部經に依りて、彌陀如來の御德を讃嘆せられたるものであるが、是れより以下は三經以外の諸經の中に顯はれたる文によりて、重ねて其御德を稱讃せらるゝにより、其意を示して、諸經のこゝろによりて彌陀和讃九首と題號を附けられたのである。

二　さてかく三經和讃の外、殊更に此一章をも加へなされたる理由は如何といふに、吾祖の御意では、釋尊出世の目的は、彌陀の本願を弘むるにあり、從つて聖道の諸經は、此目的の爲には方便の教へとなる、それもゑこゝに彌陀如來と諸經との關係を示さゞれば、一代經はすべて彌陀の本願を說く爲の前方便であるといふことが出來ない、殊に諸經所讃多在彌陀とて、諸經の中には、種々の方面から如來の功德を稱讃してあるから、是等の經意を示す爲に、特に此一章を御作りなされたるものである。

第二節　佛身讃嘆

一　無明の大夜をあはれみて　法身の光輪きはもなく
　　無碍光佛ごしめしてぞ　安養界に影現する

左訓　○おほきなるやみのよ。○ほんなうの、わうを、むみやうといふなり。○ほうしんは、すべてこゝろも、ことばも、およばぬなり。○こくにみちたまへり。○ひかり、めくる。○ひかりなり。○かげのごとくにあらはるゝなり。

○あらはれたまふ。

二久遠實成阿彌陀佛　五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛ことしめしてぞ　迦耶城には應現する

左訓　○むかしより、まことにわあみだとなりたまへるなり。○じやうぼんだいわうの、わたらせたまいしところを、がやしやうといふなり。

三百千倶胝の劫をへて　百千倶胝のしたをいだし
したこと無量のこゝろをして　彌陀をほめんになをつきじ

左訓　○萬億をいふ、てんぢくのことばなり。○まんおくをくていといふ、てんぢくのことばなり。

一、大旨　此三首は、法華經壽量品の、「我實成佛已來、無量無邊、百千萬億、那由他劫。」と「我成佛已來、甚大久遠、壽命無量阿僧祇劫、常住不滅。」の文によつて、彌陀如來の成佛の古きことを示し、尙此法身佛たる彌陀如來が、此世へ釋迦如來となりて出現なされたる旨を明し、次に稱讃淨土經の、「假使經於百千倶胝、那由多劫、以無量百千倶胝那由多舌、一一舌上、出無量聲、讃其功德、亦不能盡。」の文によつて、彌陀如來の御德の廣大なることを御示しなされたるものである。

二、句釋　○無明の大夜　無明といふは是迄で屢々出でたる辭であるが、こゝでは無明住地といふ、之れは五住地の煩惱の中の一であつて、左訓に、ほむなうのわうをむみやうといふなりとあり、迷ひの根本となるものである。大夜とは、我等衆生は此無明の爲に迷はされて、智惠の明りなき有樣を闇夜にたとへたるものである。

○法身の光輪　此法身といふ辭は、上の彌陀成佛の和讃にも出でたるが、然し彼れは大經の意によつて、彌陀の佛身を法身なりと定め給へたるもので、之れは諸經卽ち法華經大日經等の意によつて、

佛身を説明なさるゝものなれば、自然其意味が異なるのである。然らば何んと解釋すべきかといふに、慈覺大師の眞言所立三身問答によると、法身を二つの意味に分けて、理法身と智法身としてある。理法身とは、又法性法身ともいひ、色もなく形もなく、言語を以て言ひ顯すことの出來ない、眞如其物を指すのである。智法身とは、方便法身とも名づけ、之れは因位の願行成就して、一切の智慧と、一切の德を全ふせられたる佛身である。さて彌陀如來の佛身を法身と名づくるのは、此二種法身の契合したる、理智不二の法身とするのである。なぜかといふに、彌陀如來は十劫の昔に佛となりなされたとき、法性眞如をそのまゝ證り顯してをらるゝもの、此點よりすると、色もなき形もなき、周遍法界の理法身であるといへるが、それと同時に、因位の願行成就して、果上に至らせられたるものなれば、其果德たる一切の智慧と一切の德を圓かに具へ給ふのである。されば彌陀如來は、此理法身と智法身の契合したる法身佛にて在すといふことが出來る。法華經及大日經等には、此意を以て彌陀如來の佛身を讃嘆してあるもの、今是等の經意を執つて、此法身より放ち給ふ光明といふ意で、法身の光輪と仰せられたるものである。○無碍光佛とし奉めしてぞ、安養界に影現する　無色無形の法身佛が、衆生化益の爲に、西方淨土に盡十方無碍光佛といふ形を顯し給ふこと。影現するとは、水中に月の影を宿すが如く、理智不二の法身佛が、衆生の機緣に應じて、光明の御形を宿さるゝこと。○久遠實成阿彌陀佛　久遠とは、塵點久遠の昔のこと、實成とは、其塵點久遠の昔に、實に成佛し給ふといふこと。是れはもと法華經にありて、釋迦の成佛の久しきことを示したものであるが、

今は釋迦如來は卽ち阿彌陀如來の化現であるといふことを知らせんが爲、久遠實成阿彌陀佛と仰せらる。○伽耶城には應現する伽耶城とは釋尊の降誕し給へる王城。○百千俱胝　俱胝とは億の梵語である、百千とは百を千集めたことで十萬のこと、故に百千俱胝といふときは、十萬億といふ故と同じ。○百千俱胝のしたをいだし　百千俱胝の舌を出して阿彌陀如來の功德をほめたてまつること。○したごと無量のこゑをして　百千俱胝の舌に唯一種の音聲を出して譽るのではなく、種々樣々の音聲を出して、ほめ奉ること。

三、通釋　一　我等衆生は無明煩惱の爲に迷はされて、恰も闇夜に方角を執り失ふてをるが如く、いつまでも生死流轉の迷を離るゝことが出來ない、それで周遍法界の彌陀如來が、是等の凡夫を救はんが爲に、西方淨土に無碍光佛といふ御形を現し給ひ、加之、此佛が三千年の昔、五濁の凡愚を憐れみまし！〳〵て、釋迦應身の御身とならせられて、迦耶城へ出ましなされた。

二　此阿彌陀如來の御德の廣大なることは、如何なる辭を以てするも、到底述べ盡さることではない。されば稱讃淨土經には、百千俱胝の永き時間かゝつて、いろ〳〵の音聲を以てほめつくしても、尙ほめつくすことが出來ないと說いてある。

四、要文　一　彌陀如來を報身如來とさだむること、自他宗をいはず、古來の義勢ことふりたり。されば荊溪は、諸敎所讃多在彌陀とものべ、檀那院の覺運和尙は、また久遠實成彌陀佛、永異諸經之所說と釋せらる。しかのみならずわが朝の先哲は、しばらくさしをく、宗師の御釋にのたまはく、上從海德最初如來、乃至今時釋迦諸佛、皆乘弘誓悲智願行と釋せらる。しかれば海德佛より本師釋尊にいたるまで、番々出世の諸佛彌陀の弘誓に乘じて、自利々他したまへる

むね顯然なり。覺運和尚の釋義、釋尊も久遠正覺の彌陀ぞとあらはさるゝうへは、いまの和尚の御釋にあはすれば、最初海德以來の佛々も、みな久遠正覺の彌陀の化身たる條、道理文證必然なり。一字一言加減すべからず、ひとつ經法のごとくすべしとのべまします光明寺のいまの御釋はもはら佛經に準ずるうへは、自宗の正依經たるべし。傍依の經にまたあまたの證文あり、楞伽經にのたまはく、十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報身及變化、皆從無量壽極樂界中出ととけり。また般舟經にのたまはく、三世諸佛念彌陀三昧成等正覺ともとけり。諸佛自利利他の願行、彌陀をもてあるじとして、分身遣化の利生方便をめぐらすこといちじるし。これによりて久遠實成の彌陀をもて、報身如來の本體とさだめて、これより應迹をたるゝ諸佛通總の法報應等の三身は、みな彌陀の化用たりといふことをしるべきものなり。（口傳鈔）

第三節　淨土讃嘆

四　大聖易往とときたまふ　淨土をうたがふ衆生をば
無眼人とぞなつけたる　無耳人とぞのべたまふ

左訓　○しやか佛なり、ゆきやすしとなり。○まなこなきひとゝなづく。○もくれんしよもんぎやうのもんなり、くわんねんほふもんに、ひかれたり。○まなこなきひとゝいふ。○みゝなきひとゝいふ。

五　無上上は眞解脫　眞解脫は如來なり
眞解脫にいたりてぞ　無愛無疑とはあらはるゝ

左訓　○ほふしんを、むじやうじやうともいひ、しんげたちともいふ。○まことにさとりひらくなり。○よくもなく、うたがひもなきことあらわるとなり。○よくのこゝろなし、うたがふこゝろなしとなり。

六　平等心をうるときを　一子地となづけたり
一子地は佛性なり　安養にいたりてさとるべし

左訓　○ほうしんの心をうるときなり。○三がいのしゆじやうを、わがひとりごとおもふことをうるを、ゐちしぢといふなり。

七　如來すなはち涅槃なり　涅槃を佛性となづけたり

凡地にしてはさとられず　安養にいたりて證すべし

左訓　○如來とまふすは、すなはちねちはんとまふすみことなり、ねちはんとまふすは、すなはちまことのほうしんとまふす佛性なり、しるべしこのぼむぶ、このせかいにしてさとらず候へは、他力をたのみまいらせて、あんらくじやうどにしてさとる。○ぼむぶのゐどころ

一、大旨　此四首は、目連所問經の、「佛告目連、譬如萬川長流、有浮草木、前不顧後、後不顧前、都會大海、世間亦爾、雖有豪貴富樂自在、悉不得勉生老病死、只由不信佛經、後世爲人、更甚困劇、不能得生千佛國土、是故我說、無量壽佛國、易往易取、而人不能修行往生、反事九十五邪道、我說是人、名無眼人、名無耳人。」の文、並に北本涅槃經の、「解脫者名無上上、乃至無上上者、卽眞解脫、眞解脫卽是如來、若得成於阿耨多羅三藐三菩提已、無愛無疑、無愛無疑卽眞解脫、眞解脫者卽是如來、乃至如來者卽是涅槃、涅槃卽是無盡、無盡者卽是佛性。」同じき經に「佛性者卽是如來、佛性者名一子地、何以故、以一子地因緣故、菩薩於一切衆生、得平等心、一切衆生畢竟當得一子地故、是故說言一切衆生悉有佛性、一子地者、卽是佛性、佛性卽是如來。」とある文によつて、西方淨土の證果の德を稱讃せられたるものである。

二、句釋　○大聖易往　大聖とは釋迦如來のこと、易往とは往きやすしといふことで、大聖釋尊は、彌陀の淨土ほどゐきやすい淨土はないと仰せらる。○淨土をうたがふ衆生　ゐきやすき淨土に往生するものゝ少なきは、何故であるかといふに、淨土を疑ふが爲である。○無眼人無耳人　淨土を疑ふ人は、本願の謂れを信ぜぬ人であるから、耳ありながらなきも同樣、眼ありながらなきも同樣であると貶しめなさること。○無上上は眞解脫　無上上とは無上中の無上といふ辭を略したるものにて、此上なしといふこと、卽

ち佛果涅槃は最上至極の證りなれば、無上上といふ。眞解脫とは、左訓に、まことにさとりひらくなりとありて、眞の涅槃は煩惱のために苦しめらるることなく、全く業の繫縛を離れて自在なれば、眞解脫といふ。○眞解脫は如來なり　如來とは法身如來のこと、此法身如來は證りの境界なれば、眞解脫は如來なりといふ。○眞解脫にいたりてぞ　眞實報土に往生して、大般涅槃の證りにいたるといふこと。○無愛無疑とはあらはるゝ　無愛とは、愛樂なきことにて、無上菩提の佛果を得れば、己に至極の位に至れるものなれば、これ已上に願ひ望むものなしといふこと。無疑とは、因位の間は、たとひ等覺の菩薩にても、疑ひといふものがとれぬ、然し佛果に至れば、あらゆる疑ひが悉く亡くなつて了ふ。○平等心　佛果を開くと、一切衆生に對して增愛の心がなくなる、之れを平等心といふ。

○一子地　又極愛地ともいふ、佛になると、衆生が煩惱の爲に惱み苦められてをるのを見て、一人子の如く憐れむ心が起るといふこと。又極愛地とは、佛となれば衆生の善心を起すを見て、大歡喜心を生じ、その衆生を愛するといふこと。○一子地は佛性なり　佛性とは、佛になるべき性質といふこと、我等凡夫の心の中には、佛となるべき性質を具へてをる、此佛性が開發して佛果といふものが開けるのである。それでやがて開かるべき佛果の一子地を、因の方へもどして見ると、佛性は卽ち一子地といふことが出來る。尤も此佛性は此世で開發せらるべきもなりやといふに、決して然るにあらず、眞實報土に往生したる上にて、初めて顯はるゝものである。○如來すなはち涅槃なり　如來は能證の德より述べ、涅槃は所證の理より說くものなれば、その體同一なり。依つて如來すな

はち涅槃なりと仰せらる。○涅槃を佛性となづけたり

の中に、涅槃の意を說いて、涅槃はすなはち無盡、無盡はすなはち佛性なりと述ぶ。蓋し涅樂は法界に周遍して無盡無極なり、而して佛性も亦その體は眞如法性にして、法界に周遍せるものなり。されば同じく無盡無極のものなり、之れによりて涅槃を佛性となづけたりと仰せらる。○凡地にしてはさとられず、安養にいたりてさとるべし

上來述べたる、如來、涅槃、佛性なるものは、共に凡夫の境界に非ざれば、此世にてはとても證り顯はすことは出來ぬ、安養界に至りて、相好圓滿の佛となつて、初めて之れを證り顯はすものであるといふ意。

三、通釋　一　彌陀如來の淨土の往きやすく參りやすきことは、大聖釋尊の既に目連所問經の中に證明なさるゝところであつて、此易往の淨土を疑ひて往生の大事を執り失ふ者は、實に無眼人無耳人であると、嚴しくも誡めなされてある。されば此大聖の證言を信じ、本願の謂を聞信して、速かに往生の素懷を達せねばならぬ。

二　抑も此淨土の證りは、此上なき最上至極の果報なるを以て、此證りを眞解脫又は如來と名づくることである。一度此佛果を證ると、こゝに無愛無疑の大悲平等の心が起る、此平等の心の得られたる位を、一子地又は極愛地とも名づくる。又此一子地を佛性ともいひ、又は如來ともいひ、又涅槃とも名づくるのである。然し此無上上、眞解脫、一子地、如來、涅槃等の證りは、凡夫地で證り得らるゝものではない、安養界に至りて初めて之れを證得することが出來るのである。

四、要文　一　易往而無人、其國不逆違、自然之所索。（大經）

二　涅槃をば滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ。佛性すなはち如來なり、この如來微塵世界にみちゝたまへり。（唯信鈔文意）

第四節　信疑褒貶

八　信心よろこぶそのひとを　如來とひとしとしるべきなり
　　大信心は佛性なり　佛性すなはち如來なり

左訓　○われらがみだの、ほんぐわんたりきをしんじたるを、だいしんじむといふ。むじやうぼだいにいたるを、たいしんといふなり。

九　衆生有礙のさとりにて　無碍の佛智をうたがへば
　　曾婆羅頻多羅地獄にて　多劫衆苦にしつむなり

左訓　さわりあるさとりにて。○よろづのこと、さへらるゝこゝろなり。○さわりなき。○むけんぢごくのしゆじやうをみては、あらたのしげやとみるなり。ぶちほふをそしるもの、このぢごくにおちて、はちまんごふちゆうだいくなうをうく。

一、大旨　此二首は、華嚴經の、『聞此法歡喜信心無疑者、速成無上道、與諸如來等。』文と、安樂集に「一切萬法、皆有自力他力自攝他攝、千開萬閉、無量無邊、豈得以有礙之識、疑彼無礙之法乎。」とある文により、信心の得をほめて、疑惑の過失を誡められたるものである。

二、句釋　○信心よろこぶそのひと　此句は華嚴經に、歡喜信心無礙者とあつて、華嚴の法門を信じ喜ふひとといふこゝろであるが、吾祖はこの經文を以て直ちに淨土眞宗の他力信心を喜ぶ文と見て、こゝに信心よろこぶそのひとと仰せらる。○如來とひとし　この句も華嚴經に與諸如來とあつて、同じく華嚴の法を信ずるものは、如來と等しといふ意であるが、今は他力信心の行者を、如來とひとしと仰せらる。○大信心は佛性なり　他力の大信心は、やが

て淨土に往生して佛性を開覺すべき根本となるものであるから、果の佛性を現在へ執り下して、信心は佛性なりと仰せられた。○佛性すなはち如來なり　上の句に、信心によつて佛性を開覺すべき旨を述べられたるもの、其佛性とは何物であるかと、佛性の體を定めて、佛性すなはち如來なりと仰せらる。○有礙のさとり　有礙とは障礙ありといふことにて、我等凡夫の智慧では、すべてのものを知り盡すことは出來ぬ、つまり凡夫のあさき了見といふことを、有礙のさとりといふ。○無礙の佛智　凡夫の有礙の智慧に對して、佛の智慧を無礙の佛智といふ。○曾婆羅頻陀羅地獄　之れは無礙の佛智を疑ふ罪によつて苦みを受くる地獄、此地獄の苦相は、左訓に、むけんぢごくのしもじやうをみては、あらたのしげやとみるなりとあれば、無間地獄の苦に、數千萬倍の苦患を受くるなり。

佛智を疑ふ者は、此地獄にたちて、多劫が間浮び出づることが出來ぬもへ、多劫衆苦にしづむなりと仰せらる。

三、通釋　一　華嚴經の中に、他力信心を得た人は如來とひとしと讃嘆なされてある、何となれば大信心は佛果の因たる佛性と等しく、而して佛性其物は又如來といはるゝものなれば、信心を得れば即ち佛性を開發したものと同じきからである。

二　此の如く、信心なるものは、如來とひとしいといはるゝ程の廣大なる用きを有せるものなるにも拘はらず、我々は淺墓な考で、疑ふまじき佛智を疑ふて信心の天地に出ること致さぬ、然も此疑惑の罪によつて、やがて曾婆羅頻多羅地獄に落ちて、多劫の苦みを受けねばならぬ身となるのである、是れは誠に愚なることなれば、宜しく此苦因なる疑ひをすてゝ、速かに大悲の本願にすがらねば

ならぬ。

四要文　一　まことの信心を得たるひとはすでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆへに、如來とひとしき人と、經にとかれて候なり。

（末燈鈔）

第五節　諸經和讃概要

一　我祖が一代諸經の意に依つて御製作なされたる和讃は、前上の九首である。此中初めの三首は、彌陀如來の佛身を讃嘆して、彌陀は理智不二の法身にて、其法身佛が衆生化益の爲に、迦耶城に應現されたることを示して、彌陀釋迦二尊一體の旨を說き、第四首以下は、西方淨土を讃嘆して、初めは易往の淨土を疑ふ人を貶責し、次に眞土の妙證を示されたるのである。最後の二首には、信心の得と疑惑の失とを比較し、信心を得れば如來と等しく、疑惑を起せば地獄の責めを免るゝこと能はずして、信心を勸めて疑ひを誡め、斯くて此一章を結び止められてある。

二　既に述べたるが如く、諸經和讃は一代經の意によりて、御作りなされたものなれば、本據の如きも、上來の和讃のやうに、適切に符合せぬものもある。然し此れは一文一句に據り給はず、一經の大旨、或は一部の要文をかひつまんで、れ示になつてをるからである。其邊は他日本經に就きて、親しく研究すべき必要があるのである。

第七章　現世利益和讃

第一節　總題標章

現世利益和讃　十五首

一　現世の利益に二種ある、一に方便の現益、二に眞實の現益である。方便の現益とは、不信心の人を淨土眞宗に入らしめんが爲に、念佛の利益を說く場合で、念佛を稱へた力で、病が治るやうなことが其例である。眞實の益とは、之れは行者の方には求めざるに、自然と得らるゝ益にて、信心の上より念佛する者は、自ら諸天善神の加護を受け、延年轉壽の利益を蒙むることゝなる。而して此眞實の利益に、通益と別益とがある。通益は自力他力に通じて得らるゝ利益、別益は他力念佛者に限る利益である。吾祖の仰せらるゝ現生十種の益の如きは、此別益である。

二　最も此和讃御製作の思召は、持名鈔に、まめやかに淨土をもとめ往生をねがはんひとは、この念佛を以て現世のいのりとれもふべからず、たゞひとすぢに出離生死のために念佛を行ずれば、はからざるに今生の祈禱ともなるなりとあるが如く、念佛には現世の利益があるによつて、彌陀如來を祈れよといふのではない、たゞ信心の上より念佛すれば、求めずして無量の益を得るといふた意を示されたるものである。

第二節　鎭護國家

一　阿彌陀來來化して　息災延命のためにて

金光明の壽量品　ときたきたまへるみのりなり

左訓　○きたりげんじたまふ、あはれみたまふ。○きたり、あはれみたまふ。○わざはい反。○のぶいのち。○しちなんをとゞめ、いのちをのべたまふなり。○四くわんのきやうなり、これをさいしようわきやうといふなり、じふくわんなり。○このじゆりやうほんは、みだをときたまへるなり。

冠註　○東方やくし。○南方くゐかい。○西方むりやうじゆぶち。○北方しやかのときたまふ。○しちくわんのきやうなり。

二山家の傳教大師は　國土人民をあはれみて
七難消滅の誦文には　南無阿彌陀佛をとなふべし

左訓　○ひゑのやまなり。○きゆ、ほろぶ。○そらに、うかべよむを、じゆといふ。

一、大旨　此二首は、金光明最勝王經の、『由此經威力、能離諸災横及餘衆苦難、無不皆除滅。』の文、並に同じく四卷の金光明經の『壽命損滅、貧窮困苦、乃至是經威德、能悉消除。』の文の意によりて、息災延命七難消滅の利益を示されたるものである。

二、句釋　○阿彌陀如來來化して　來化は、來現悲化の義にして、阿彌陀如來が衆生教化の爲に、此世へ出現なされたといふこと。○息災延命のためにとて　念佛の威德を以て、壽命損減、貧窮困苦の難を消滅すること。○金光明の壽量品　金光明經とは、金光明經のこと、此經に三品ありて、一には曇無讖三藏の譯せられたる金光明經四卷、二には合部の金光明經八卷にして、之れは舊譯の金光明經をば三部一處に合したるものなり、三には義淨三藏の譯せられたる金光明最勝王經十卷なり。今此和讃の本據は、十卷經と四卷經とである。次に壽量品とは、此金光明經の中の、釋迦の壽命無量なることを說きたる一品なり。しかるに此壽量品を彌陀の說き

給ふものとするは、是れは台密の相傳によるに、經の正宗分の四品を、四方四佛に配當すると、第一品の壽量品が彌陀の說となる、而して此金光明經は、法華經仁王經と共に、古來鎭護國家の三部經と名づけて、現世の利益最も顯著なる御經として傳へられてある。○山家の傳教大師　傳教大師は天台宗の開祖にて、叡山にをられたから、山家の大師、又は根本の大師とも尊稱する。○國土人民をあはれみて　國內の人々の、難義してをるのを、憐み給ひてといふこと。○七難消滅の誦文　七難とは、一に日月失度難、二に星宿失度難、三に災火難、四に雨水變異難、五に惡風難、六に亢陽難、七に惡賊難なり。之れを細かに分けると、二十九難といふ數多きことになる。誦文とは、經卷陀羅尼の讀誦の文と云ふこと。○南無阿彌陀佛をとなふべし　傳教大師は七難消滅の爲に、南無阿彌陀佛を稱へよとて勸めなされたること。

三、通釋　一　阿彌陀如來は、息災延命七難消滅の法として、金光明の壽量品を說き遺されたのである。されば此佛の御名を稱する者は、必ず超證涅槃以外に、現世の利益を蒙ることが出來るのである。

二　昔、嵯峨天皇の時、天下に日照りつゞき、或は雨降り、病たこり、戰亂生じて國內安からざることがあつた。其時天皇は傳教大師を召され、いづれの行にてか、此難を止むべきやとて尋ねなされたれは、大師はたゞちに、七難消滅の法としては、南無阿彌陀佛を稱ふるにしかじと、た答へなされたといふことである。

四、要文　一　されば阿彌陀如來には、現世後生の利益ともにすぐれたまへるを、淨土の三部經には、後生の利益ばかりをとけり。餘經にはおほく現世の

利益をもあかせり。かの金光明經は、鎮護國家の妙典なり、かるがゆゑにこの經よりときいだすところの佛菩薩をば、護國の佛菩薩とす。しかるに正宗の四品のうち、壽量品をときたまへるは、すなはち西方の阿彌陀如來なり、これによりて阿彌陀如來をば、ことに息災延命護國の佛とす。（持名鈔）

第三節　滅罪利益

三　一切の功德にすぐれたる　南無阿彌陀佛をとなふれば
　　三世の重障みなながら　かならず轉じて輕微なり

左訓　○すくなくなす反。よくなす反。○からくすくなくなす。○おもきつみなり。○かろくなし。すくなくなす。うすくなす。

四　南無阿彌陀佛をとなふれば　この世の利益きはもなし
　　流轉輪廻のつみきへて　定業中夭のぞこりぬ

一、大旨　此二首は、安樂集の、『或有三三昧一、但能除貪不能除瞋癡、乃至修念佛三昧一、無間現在過去未來、一切諸障悉皆除也。』とある文、並に觀念法門の、『言滅罪增上緣者、卽如觀經下品上生人、一生具造十惡重罪、其人得病欲死、遇善知識、教稱彌陀佛一聲、卽除滅五十億刼生死重罪、卽是現生滅罪增上緣、乃至言護增上緣者、卽如第十二觀中說云、若有人一切時處、日夜至心、觀想彌陀淨土二報莊嚴、若見不見、無量壽佛、化作無數化佛、觀音大勢至亦作無數化身、常來至行人之所、亦是現生護念增上緣。』の文によりて、轉重輕受、滅罪延壽の利益を示されたるものである。

二、句釋　○一切の功德にすぐれたる　六字名號の中には、萬善萬德がこもれるがゆゑに、あらゆる功德の中にて、最も勝れたるものであるといふこと。選擇集に、然れば卽ち佛の名號は、餘の一切の功德に勝れたりとあるは、この意である。○三世の重障　過去

現在未來の重き罪障について、念佛以外の行にては、到底之れを消滅することが出來ぬが、獨念佛三昧を修すれば、是等の罪障が悉くなくなる。○かならず轉じて輕微なり　轉は轉變の義、輕微はかろくすくなくなること。念佛の行者は願力不思議の力によつて、一念のたち處に三世の業障一時に消滅して、正定聚不退の位に至る、是れをかならず轉じて輕微なりと仰せらる。○南無阿彌陀佛をとなふれば、この世の利益きはもなし　萬德具足の名號を稱ふれば、其德廣大にして現世の利益はきはもなしといふこと。吾祖は信卷に、現世の十益を擧げて、一には冥衆護持の益、二には至德具足の益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益と仰せられてある。

○定業中夭のぞこりぬ　定業は、生れはじめしより定まれる業にて、我々の生命に一定の期間のあること。中夭は若死することにて、假令へば五十まで活くべき筈のものが、三十にて死ぬなどゝいふは中夭である。さて念佛を稱ふるものは定業中夭を除くことあれば、念佛の行者はいつまでも死なずにをるかといふに、勿論念佛の德からいへば、それ位の利益のあるは當然なれども、然し佛の本意は、今生にいつまでも活き永らへさせてたくといふのが目的ではない、早く淨土に往生させて、無上の樂果を得さしめんと云ふにあり。されば こゝに定業中夭をのぞくとあるは、全く念佛の勝益を示されたるものと知らねばならぬ。

三、通釋　一　一切の功德の中にて、殊に勝れてある名號を稱ふるときは、三世の重障も輕くなり、流轉輪廻の苦を免がれ、その上定

業中天の死ぬる期間も延ばしていたゞくことゝなる。

四要文　一　たゞし今生をまもりたまふことは、もとより佛の本意にあらず、かるがゆへに先業もしつよくば、これを轉ぜぬこともおのづからあるべし、後生の善果をねしめんことは、もはら如來の本懷なり、かるがゆへに無間に墮在すべき業なりとも、それをばかならず轉ずべし。しかればたとひもし今生の利生はむなしきにゝたれることありとも、ゆめゆめ往生の大益をばうたがふべからず。いはんや現世にもその利益むなしかるまじきことは、聖教の說なればあふいでこれを信ずべし。（持名鈔）

第四節　護念利益

五　南無阿彌陀佛をとなふれば　梵王帝釋歸敬す
諸天善神ことゞく　よるひるつねにまもるなり
左訓　○てんのかみたちなり。

六　南無阿彌陀佛をとなふれば　四天大王もろともに
よろづの惡鬼をちかづけず
堅牢地獄は尊敬す
よるひるつねにまもるなり
左訓　○あしきおになり。

七　南無阿彌陀佛をとなふれば
かげとかたちとのごとくにて
左訓　○このちにあるかみ。○ちよりしたなり。○かみをけんらふうぢぎといふ。○たうとみ、うやまふ。

八　南無阿彌陀佛をとなふれば　難陀跋難大龍等
無量の龍神尊敬し
よるひるつねにまもるなり
左訓　○たふとみ、うやまふ。

九　南無阿彌陀佛をとなふれば　炎魔法王尊敬す
五道の冥官みなともに
よるひるつねにまもるなり
左訓　○たうとみ、うやまふ。

一〇　南無阿彌陀佛をとなふれば　他化天の大魔王

釋迦牟尼佛のみまへにて　まもらんとこそちかひしが
二 天神地祇はことく〳〵　善鬼神となづけたり
これらの善神みなともに　念佛のひとをまもるなり
三 願力不思議の信心は　大菩提心なりければ
天地にみてる惡鬼神　みなことゞ〳〵くたそるなり
一三 南無阿彌陀佛をとなふれば　觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と　かげのごとくに身にそへり、
左訓 ○いさごのかずのごとく、ちりのかずのごとく。
一四 無碍光佛のひかりには　無數の阿彌陀ましまして
化佛たのゝ〳〵ことゞ〳〵く　眞實信心のまもるなり
一五 南無阿彌陀佛をとなふれば　十方無量の諸佛は
百重千重圍繞して　よろこびまもりたまふなり

左訓 ○あまた反。○かさねて、かこみめぐる。

一、大旨　此十四首は、觀念法門の、『佛言、若人專行此念彌陀三昧者、常得一切諸天、及四天大王、龍神八部、隨逐影護、愛樂相見、永無諸惡鬼神、災障尼難、橫加惱亂。』の文、並に、『若有人、至心常念阿彌陀佛及二菩薩、觀音勢至常與行人、作勝友知識、隨逐影護、此亦現生護念增上緣。』の文等によりて、冥衆護持の益と諸聖護持の益を明し給ひしものである。

二、句釋　○梵王・帝釋　梵王とは、色界初禪天の王なり。帝釋とは、欲界六天の中の第三忉利天の主なり。この二人の神を初めとし、あらゆる天の神々が念佛の行者を晝夜不斷に守り給ふ。○四天大王　帝釋天の臣下にして、須彌の四方に住する神なり。其名を、多聞天、持國天、增長天、廣目天といふ。此四天王が念佛行者の身

邊を離れず、惡魔の爲に、惱まされぬやう守り給ふ。○堅牢地祇　此れは大地の底に棲んで居る地の神なり、此地神が影の形にそふごとく、よるひるつねに守護す。○難陀跋難大龍等　之れは八大龍王の中の者である、八大龍王とは、一に難陀、二に跋難陀、三に婆伽羅、四に和修吉、五に德叉迦、六に阿那婆達多、七に摩斯、八に優鉢羅龍王である。是等の龍神を初め、其他無量の龍神が、よるひるつねに護ること。○炎魔法王　地獄を統御する王なり。此炎魔法王は五道の役人と共に、念佛の行者を守護す。○他化天　欲界六天の最上位にある他化自在天のこと。此天の魔王が多くの眷屬と共に、釋尊の御前にて、今より後は念佛行者を守護しませうと、誓を立てられた。○天神地祇　天神は天の神、地祇は地の神、是等の神々は、善人を守護する神なれば、善鬼神と名づく。而して此善鬼神が念佛の人を護りくださる。○願力不思議の信心　此句の意について古來二つの義が傳へられてある。一には佛の本願力を信ずる信心と解するのと、二つは願力の不思議によつて起る信心と解するのとである。之れは何れにしても同じやうなことであるが、然し下の二句からかへりみると、第二義の方が親しい。何故かといふに、天魔波旬惡鬼神等の爲に破壞せられぬやうな大信心は、どうして起つかといふに、本願の不思議力より廻向せられたるものであると見ねばならぬ。それゆゑ此樣な堅固なる大信心であるから、夜叉羅刹の如き惡鬼でも、念佛の行者には恐れをなして逃げかくれるといふことである。○無碍光佛のひかり　阿彌陀如來の光明の中に、無數の化佛あらはれ給ひ、其化佛方が眞實信心の行者を守護し給ふ。

三、通釋　一　一切の功德に勝れたる南無阿彌陀佛をとなふれば、梵天、帝釋、四天大王、堅牢地祇、難陀、跋難陀、炎魔大王、及他化自在天の神々が、念佛行者の身邊を離れずして晝夜不斷に御護りくださる。又念佛の信者に對しては、善神はよろこびまもり、惡神は恐れて逃ぐる。加之、觀音勢至は化菩薩を出し、阿彌陀如來は化佛を出し給ひて、共に行者を御守りなされ、其他十方世界のあらゆる諸佛が、百重千重とりかこんで、隨逐影護なしくださるのである。

四、要文　一　ひとへに彌陀一佛に歸してたてまつりて淨土をねがはゝ、もろ〳〵の神明は晝夜につきそひまもりたまふべきがゆへに、もろ〳〵の災禍ものぞこり、一々のねがひもみつべきなり。權社の神はよろこびて擁護したまふべし、本地の悲願にかなふべきがゆへなり。實社の神はおそれてちかつかず、もろ〳〵の惡鬼神をしてたよりをゆしめざるがゆへなり。（諸神本懷集）

二　若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者、彼佛卽遣無量化佛無數化觀音勢至菩薩、護念行者、與二十五菩薩等、百重千重、圍繞行者、不同行住座臥、一切處若晝若夜、常不離行人。（行卷）

第五節　現世利益和讃概要

一　吾祖が念佛に現世の利益あることを示されたる和讃は、前上の十五首である。その中初めの二首は、鎭護國家の利益を述べて、念佛には息災延命七難消滅の益あることを示し、第三首より第十一首までは、念佛の通益を示して、初めに轉重輕受、次に滅罪延壽の益を述べ、それより以下六首には、冥衆護持の益を明して、委しく諸神の守護を說明し、第十二首以下は、念佛の別益を述べ、惡神の怖畏、菩薩の影護、彌陀の光攝、諸佛の圍繞をも示しなされたるものである。

二　此の如く念佛には廣大なる現益の存するものなれば、未信

の輩は此利益を緣として眞實に入れよ、信心の行者は、益々佛恩の甚重なることを忘れず、稱名念佛せよとあるのが、此一章の趣意である。

第八章　勢至和讃

第一節　總題標章

首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる　八首

一　上來一百八首の和讃を作りて、阿彌陀如來の功德莊嚴及念佛の利益を、各方面より稱讃し奉られたることであつたから、淨土和讃の目的は充分達せられてをるのである。然るに茲に復大勢至菩薩和讃をた加へなされたのは、如何なる理由にもとづかれたるものであるかといふに、その思召は、御傳鈔の中にもあるが如く、吾祖は聖德太子と法然上人との引導に順じて、淨土眞宗を興隆し、如來の本願を弘め給ふたのである、而してその法然上人の御本地

は大勢至菩薩である、されば法然上人を尊敬なさる以上は、是非とも其本地たる大勢至菩薩の御德を讃嘆し給はねばならぬ、それゆゑ此八首を作つて、之れを淨土和讃の終りに加へ、上來所說の教へは、我師大勢至菩薩の御指示によりて說き述べたるものであるとの意を、ゐ示しなされたるものである。

第二節　敬禮世尊　五十二菩薩もろともに　佛足頂禮せしめつゝ

一勢至念佛圓通して
すなはち座よりたゝしめて

左訓　○まどかにかよふ。○ほとけのみあし。

一、大旨　此一首は、首楞嚴經の、「大勢至法王子、與其同倫五十二菩薩、卽從座起、頂禮佛足、而白佛言。」の文に依りて、勢至菩薩は念佛圓通といふ道理をゐ證りになつて、御同伴の五十二人の菩薩と共に、釋迦如來を禮拜なさるゝ模樣を述べられたるものである。

二、句釋　○勢至念佛圓通　勢至菩薩は、念佛によつて圓通を證られたといふこと。圓通とは、眞如法性の理のことで、此眞如なるものは、天地間にゆき亘つてをるもので、如何なるものでも此理を離れて存在するものはない、それゆゑ眞如は一切萬物に圓滿に通じてをるといふ意で、圓通といふ名をつける。而して此圓通の理を證るには、いろ〳〵の方法があつて、楞嚴經によると、二十五人の聖者がそれ〴〵此理を證られたる模樣を說き示してある、之れを二十五圓通といふ。さて此二十五人の第二十四人目が勢至菩薩である、菩薩はどういふ方法で圓通の理を證られたかといふに、念佛三昧によつて證られたのである、その意をこゝに勢至念佛圓通

して仰せられた。○五十二菩薩もろともに　勢至菩薩は五十二人の菩薩を伴ふて、自ら釋迦如來の御前に來りて禮拜をなし、我れ往昔恒河沙劫の昔に、超日月光の出世に遇ひ、そのとき念佛三昧の教を受け、是れによつて圓通を證りましたと申し述べられた。

三、通釋　**一**　楞嚴經の會座に集まられたる二十五人の菩薩方は、或は色により、或は聲により、香により、味によりて、それ〳〵自己が便利の方法を以て、圓通を證り顯はされたのであるが、第二十四人目の勢至菩薩は、念佛三昧によりて、此理を證得なされたのである。

二　此とき彼の二十五聖は、各自同伴の菩薩と共に、此經の會座に列せられたことであつた。中にも藥上藥王の二菩薩は、五百人の眷屬を伴ひ、跋陀羅菩薩は十六人の菩薩を同伴なされ、勢至菩薩は五十二人の菩薩を伴ふて、自己が所得の法を申述べらるゝのである。その時勢至菩薩は、此同伴の菩薩と共に、釋迦如來を恭敬禮拜なされ、

第三節　師佛指示

二教主世尊にまふさしむ　往昔恒河沙劫に
佛世にいでたまへりき　無量光とまふしけり

左訓　○しやかによらいなり。○むかしといふ。

三十二の如來あひつぎて　十二劫をへたまへり
最後の如來をなづけてぞ　超日月光とまふしける

一、大旨　此二首は、楞嚴經の、「白佛言、我憶往昔河沙劫、有佛出世、名無量光。」の文によつて、勢至菩薩が教へを受けられたる師匠の

佛のことを、れ述べなされたるものである。

二、句釋　○教主世尊にまうさしむ　教主世尊は、娑婆世界の教主たる釋迦如來のこと、まうさしむは、勢至菩薩自ら釋尊に申し上げらるゝこと。○佛世にいでたまへりき、無量光とまふしけり　之れより勢至菩薩、自ら因位の昔を物語りあらせられ、往昔恒河沙劫の昔に、此世に初めてれ出ましなされたる最初の佛は、無量光佛であると申されたこと。○十二の如來あひつぎて、十二劫をへたまへり　最初の無量光佛より、一劫に一佛づゝ御出世あらせられ、十二劫の間に十二佛の出現あり、最後十二番目の佛を超日月光佛といふ。此超日月光佛の教を受けられたのが勢至菩薩である、その事は次の章に出て居る。さて此佛名について、第一の佛は無量光佛、第十二佛は超日月光佛とするならば、中間の九佛は何といふ佛であるかといふに、之れは經文に出てをらぬもゝ確かと分らぬが、前後の佛名より考へ、又佛の數が十二佛とある點より見ると、大經の十二光佛と同じことで、阿彌陀如來のことであらうといふのが古來の定論である。それもゝ楞嚴經によるも、彌陀如來は十劫の昔に、初めて成佛なされた佛ではない、往昔恒河沙劫の昔に、已に佛となりなされてある、古き佛であるといふことゝなる。

三、通釋　一　勢至菩薩は釋迦如來に對して申し上げらるゝやうは、往昔恒河沙劫の昔に、佛が御出現になりました、此佛を無量光佛と申し上げます。此佛を最初として、それより十二劫の間に、十二佛があらわれ給ひ、第十二佛目の最後の如來を、超日月光佛と申します。私は此佛の出世の時に、初めて念佛三昧を授かつたのでありますと申された。

第四節　正述受敬

四 超日月光この身には　念佛三昧わしへしむ
十方の如來は衆生を　一子のごとく憐念す

左訓　○あわれみおぼしめす。

五 子の母をわもふごとくにて　衆生佛を憶すれば
現前當來とをからず　如來を拜見うたがはず

左訓　○おもひまいらずとなり。○みたてまつるなり。

五 染香人のその身には　香氣あるがごとくなり
これをすなはちなづけてぞ　香光莊嚴とまうすなる

左訓　○かうばしき、かみにそめるかごとしといふ。○かうばしき、かのあるがごとしと。○ねむふちは、ちねなり。

一、大旨　此三首は、楞嚴經の、『十二如來相繼一切、其最後佛、名超日月光。』とある文、並に「彼佛教我念佛三昧、乃至去佛不遠。」の文、及「如染香人身有香氣、此則曰香光莊嚴。」の文に依つて、勢至菩薩が超日月光佛より、念佛三昧の教を受けられたる模樣を、示されたるものである。

二、句釋　○超日月光この身には　この身とは、勢至菩薩自らを指しなされたる辭で、超日月光佛が自分に念佛三昧を授けなされたといふ意。時に此念佛三昧につきて、理觀の念佛と見るのと、憶念稱名の念佛と見るのと二樣の見方がある。理觀の念佛といふは、法身佛を觀ずることで、初めに定に入つて佛の相好莊嚴を觀念し、其觀が出來上ると、次に法界に周遍する法身の理佛を觀念するのである。之れに對して憶念の念佛とは、憶念稱名のことで、信心を起して口に稱名を稱ふることである。處が此二種の中、吾祖

は第二の憶念稱名の他力念佛を以て、念佛三昧なりと解釋なさる。其は理觀の念佛は自力の視察である、稱名は他力念佛である、すでに述べたるが如く、勢至菩薩は超日月光佛の教を受けられて、念佛三昧を證られたのである、卽ち西方淨土の彌陀の教を受けられたるものである以上は、どうしても理觀の念佛と見ることは出來ぬ、是非共彌陀の名號を稱ふる稱名念佛とせねばならぬ。○十方の如來は衆生を、一子のごとく憐念す　此句は、衆生の憶念は、衆生自ら起す憶念に非ず、如來の衆生を憐み給ふ念力が顯はれたのであるとの意を、示されたるものである。○子の母をたもふごとくに、て衆生佛を憶すれば　母の慈愛が子にあらはれて、子が母親にすがる如く、佛の憐念が衆生の方にあらはれて、自然と佛を念ずるやうになつた。さて念佛三昧が、もし理觀の念佛であるならば、子が

母を思ふがやうな味ひは起らぬ、十刼正覺の大悲の念力なればこそ、彌陀一佛にすがる思ひが起つてくるとの意を示めさる。○現前當來とたからず、如來を拜見うたがはず　現前とは現在、目の前といふこと、當來は未來といふこと、他力信心の行者は、佛の常に附きそひ給ふがゆゑに、現在目の前に佛を拜むことが出來る、然し我等は罪障の雲霧深き身の上なれば、此世では拜むことは出來ぬにしても、今にも命終らば、眞實報土にたいて、必ず拜み奉るのである。○染香人のそのみには、香氣あるがごとくなり　染香人とは、香に染む人といふこと、香を扱ふ人は、いつとはなくよい香がするやうに、常に念佛する人は、いつかは必ず佛を見るにちがひはない。○これをすなはちなづけてぞ、香光莊嚴とまふすなる　上の念佛三昧を受けて、之れをすなはち香光莊嚴を名づくるといふ意。香光

とは、香はたとへ、光は光明にして、智慧の念佛のこと、念佛を香にたとへて、香光と仰せらる。此念佛を以て行者の身を莊嚴してをるものは、形はいかやうなりとも、罪は五逆十惡なりと雖も、現前當來、必ず如來を見奉る利益を得るといふ意で、香光莊嚴と名づくるのである。

三、通釋　**一**　勢至菩薩の給ふやうは、超日月光佛は、此身に念佛三昧をた授けになつた。此念佛三昧とは如何なるものであるかといふに、佛を念ずることである、而して此佛を念ずることは、もと如來の方に衆生を憐念し給ふ念力のあらはれたものであつて、たとへば母親の慈愛が子に顯はれて、子が親を慕ふやうになつたと同じく、衆生が一心一向に佛を念ずると、現在若しくば將來にといつて、いつかは必ず如來を拜み奉ることが出來るのである、丁度香に染む人が、いつもよい香ひを發するやうに、常に念佛に日を送つてをる人は、必ず佛を拜むに相違ない。それゆゑ念佛の行者を名づけて、香光を以てその身を飾り立てゝをる人といふのである。

第五節　二利成就

七われもと因地にありしとき　念佛の心をもちてこそ
無生忍にはいりしかば　いまこの娑婆界にして
左訓　○ふたいのくらゐとまふすなり。○かならずほとけになるべきみとなるなり。

八念佛のひとを攝取して　淨土に歸せしむるなり
大勢至菩薩の　大恩ふかく報ずべし

一、大旨　此二首は、楞嚴經の、「我本因地、以念佛心、入無生忍、今於此界、攝取念佛人、歸於淨土。」の文に依つて、勢至菩薩は念佛三昧を

選び給ひて、自ら無生忍に入り、又人をも化益なされて、自利々他の德を成就し給ふ謂れを、示されたるものである。

二、句釋　○われもと因地にありしとき　われとは、勢至菩薩自らを指す辭、因地とは、往昔恒河沙劫の昔、勢至菩薩の因位の修行をなされしときのこと。○念佛の心　念佛三昧を得られたる心といふこと。○無生忍　普通の解釋では、地上の菩薩が、一切諸法の不生不滅の眞理を證られたる位といふ。所が吾祖は、無生は無生の生といふことで、眞實報土の往生のこと、忍は忍可決定の義で、信心を得ると同時に、此世に居ながら、佛になるに定つたこと。つまり念佛行者が、信の一念に正定聚の位に入りたるを、無生忍と名づくといふことに解釋さるゝ。○いまこの娑婆界にして、念佛のひとを攝取して　勢至菩薩は因位のときより、念佛三昧によつて無生忍に入り、今此娑婆世界に顯はれて、此念佛三昧を以て、衆生を攝取して淨土へ參らしめ給ふ。○大勢至菩薩の、大恩ふかく報ずべし　此二句は、前來述べ來つたる讃文を結び止められた結文である。即ち勢至菩薩の御恩があればこそ、我等凡夫は念佛の謂れを聞くことが出來たのである。それも忝荷も他力念佛の謂れを信じて淨土往生を願ふ者は、此御恩の甚重なることを忘れてはならぬ。

三、通釋　一　勢至菩薩は因位の修行を成就なされ、念佛三昧によつて無生忍の位に入り給ひ、今又此娑婆世界にては、法然上人と顯はれて、念佛三昧を以て、我等衆生を教化し給ふ。之れを思へば、菩薩の教へがなかりしならば、我等凡夫は他力易行の御法を信ずる身となることが出來なんたのである。然るに今幸にして造惡不

善の身なから、之れを信しで、佛となることの出來るは、全く此菩薩の恩德である。されば一聲の念佛を稱ふるについても、先づ菩薩の大恩を思ひ出さねばならぬことである。

第六節　勢至和讃概要

一　吾祖が楞嚴經に依つて、勢至菩薩の德を讃嘆せられたる和讃は、前上の八首である。先づ最初の一首は、菩薩所得の法を擧げて、それを述べ給ふに當つて、釋尊を禮拜なされたることを示し、第二首より終りまでは、菩薩自得の念佛三昧の意を述べられたるものである。其中初め二首には、久遠實成の阿彌陀如來が、恒河沙劫の昔、十二の如來となりて世に出現なされ、其最後の如來の超日月光佛より念佛三昧を授けられたる旨を示して、菩薩の因位の修行の有樣を說き、第四首と第五首は、正しく念佛三昧の意を述べ、第六首はその念佛三昧の喩の上より說明し、最後の二首は、菩薩の自利々他の二行を成就なされたる旨を示された。

二　かくて我等凡夫に對し、苟も稱名念佛する者は、菩薩の大恩を忘れてはならぬことを示しなされて、此一章を結び止められたるものである。

淨土和讃講話　終

大正二年七月二十五日印刷
同　年八月　一　日發行

定價　金七拾錢

著作者　眞宗京都中學
右代表者　蓮琢了

發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十人講町二十二番戸　西村七兵衛

發賣所　京都市東六條中珠數屋町　法藏館
（電話下四五八番）（大阪口座一七〇四番）

著作權所有

眞宗京都中學藏版

342
353

終